

東北紀行

Tohoku Travelogue

第 66 号 / 2026 年 2 月 / 編集：丸岡泰（石巻専修大学）

東北震災復興とエコツーリズム

—宮古市の観光文化再考と教育旅行

文教大学 海津ゆりえ

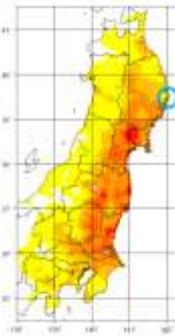
東日本大震災と地域比較（東北・能登）の視点

私の専門はエコツーリズムである。といってもエコツアーを開発するというより、欲しい未来を引き寄せるためにエコツーリズムに取り組む地域の後押しを各地で実践している。今日は、やがて 15 年が経とうとしている東日本大震災を機に私自身が関わるようになった岩手県宮古市でのプロジェクトと、その東北沿岸でこれから長く続いていこうとしている旅の現場の話をしたい。災害復興とエコツーリズムもまた深いところでつながっている。

この画像はご覧になった方いらっしゃると思うが、東日本大震災による津波が堤防を乗り越えた瞬間を宮古市役所 5 階の会議室から撮った写真である。地震による揺れは宮城に比べれば大きくはなかったが、宮古市は本州で最も太平洋に張り出している場所であり、トラフに近いため津波による被害は甚大であった。東北の小さな事例をご紹介したい。

15 年近く東日本大震災から経ったことで、今日の私の話は、岩手県の宮古市でしてきたことを使用しながら長く続く災害の現場で、長く続いていこうとしている旅の現場から、話したい。

岩手県宮古市



令和 6 年能登半島地震（2024 年 1 月 1 日）による被災との違いで一番感じるのは、阪神淡路大震災以来の大規模自然災害（「未曾有」とも呼ばれた）として国内外からの注目が集まったことである。そして東日本大震災はとにかく沿岸域の津波被害が大きかった。沿岸のどの町でも、地形による被害規模の差はあっても津波は共通の体験であった。また、能

登でいえば輪島や和倉温泉に匹敵する規模で観光に経済を依存する町があるわけではなかった。陸中海岸国立公園の美しい景観は人々を引き付け、代表的な観光資源として宮古市の「浄土ヶ浜」がある。名前の由来は、古えのお坊さんが「さながら浄土のごとし」と評したことによるとされ、白い奇岩が海の青に映えて本当に美しい。だが宮古市はもともと宮古湾を拠点とする漁業と港湾のまちである。他の町も同様で、漁業や工業などを基幹産業とするまちが多い。他方、港湾都市同士、あるいは内陸都市と沿岸都市の交流などは習慣的に存在していた。自動車道や鉄道による南北方向の軸と、山岳—沿岸を結ぶ東西方向の軸が交差する「ラダー構造」を形成している。



復興資金配分と“観光の文化”の再考

私が宮古と関わったきっかけは、復興となると莫大な資金の投下はハードを元に戻すところに来る。住まいと産業の復興だ。道路も含め大きく動く復興が最優先だ。住民の生活、気持ち、あるいは観光も 2 の次になってしまった。

観光が 2 の次というのは、受け入れ体制ができるまでは確かにそうだが、そんな遊びは、とか娯楽は、と後回しにされた。そこについてそれは違う、というところが出発点だ。

今回のこのプロジェクトの先生と話をする中で、こういう災害が起きたからこそ、観光の文化の視点から、その都市にある文化をどう繋ぐかという文化の復興を考える必要があるというのが一番の問題意識だった。

調べてみると、縄文時代から、ここは未曾有じゃなく何度も繰り返す大自然災害と津波を経験している。それでも住み続けてきている。そういう地域のため、計り知れない私たちが知らない潜在力をもつのではないかも考えた。

エコツーリズムの本質と実装

私が宮古と関わったきっかけは、復興において観光は後回しという風潮に疑問をもったことである。住まい、インフラ、産業の復興が最優先であるから、莫大な復興予算はハードに費やされる。結果として人々の気持ちや楽しみ、そして観光は二の次になってしまった。受け入れ体制ができるまでは確かに訪れることはできないが、「遊び」や「娯楽」の復興は数年後とも公言された。それは違うのではないかと疑問をもったのである。

後にプロジェクトメンバーとなった方々と、このような災害が起きたからこそ、その都市にある残された文化をどう繋

くかという観光の視点から再興を考える必要があるのではないか、と話し合った。調べてみると、縄文時代から、ここは未曾有じゃなく何度も繰り返し大自然災害と津波を経験している。それでも住み続けてきている。そういう地域には、計り知れない私たちが知らない潜在力をもつのではないか。それを学ぶことが重要であり、観光にはその役割を果たす力があるのではないかと考えたのである。

私が専門にしているエコツーリズムというのは、自然を活用した観光という意味ではなくて、もともと地域が持っているポテンシャル、すなわち自然、生活文化、あるいは自然との付き合い方や暮らしの知恵などに着目し、それを守りながら伝えることを通じて、観光者にも地域にも裨益するものである。二戸市長（当時）を介してご紹介いただいた宮古市で、エコツーリズムの考え方で復興に寄与したいと考えたのである。幸い、宮古市長も私達の意味を受け入れていただき、プロジェクトがスタートした。



宮古市での実践プロセス（2011-2013 以降）

2011年8月、社会福祉協議会が宮古市川井に設けたボランティアの拠点（旧川合高校）で1週間キャンプしながら調査（宝さがし）を実施した。翌年10月には、調査結果から導いたエコツアーを2つ作り、域外から参加者を招き実施した。モニターツアーである。実施した結果で翌年の継続の可否を決めようと考えていたが、評価が高く、このうち次に述べる1つのツアーを残すこととなった。2013年には主体が宮古市観光文化交流協会に移り、我々はツアー時の安全管理や事前の草刈りなどの後方支援に回った。現在は宮古ジオパーク推進協議会が主体となり、毎年7月に実施している。

そのツアーは内陸にある黒森神社を主たる資源とするものである。この神社は標高330mの黒森山の中腹にあり、津波の影響は全く受けなかったが、沿岸漁業者とは深いつながりがある。三陸沿岸が漁業の大基地だった時に、海からよく見えるこの山はあて山となり、「黒森さんが良い漁場を教えてくださいから我々は漁業ができる」と、信仰対象になった。その神社を守ってきた麓の集落から神社まで、ガイドが自然・文化・歴史を解説しながら登り、神社で奉納神楽「黒森神楽」（国指定重要無形文化財）を鑑賞するというシンプルなものである。集落や宮古市内の人々が一緒に歩きながら語り合い、楽しみながらゆるやかに交流する。被災地をなかなか訪れることができなかった域外の人も、楽しみを控えてきた地域の人も、神域を訪ねる旅を通してわだかまりを解いてい

くものだ。

当初は、私たちが「海と山と人々と神をつなぐ〜黒森神楽と黒森神社、山口集落を歩く〜」というややこしく長ったらしい名前をつけていたが、宮古側からシンプルにしたいと「黒森神社まで一緒に歩きませんか?」に変更された。大歓迎である。コロナ禍で2年間中断したが、既に10年以上続いており、すっかり宮古の夏の恒例行事となった。

見出した宮古の「新たな」資源

上述したように、本プロジェクトは宮古の資源を知るところから開始した。2011年夏の、復旧も落ち着かない時期ではあったが、宮古市観光港湾課（当時）のご協力により、神楽関係者、神社関係者、地元の食の専門家、国立公園パークボランティア、博物館関係者、当時盛んに獲れていた鮭の博士などから聞き取り調査を行った。皆たいへん温かく迎えてくださり、様々なことを教えてくださった。代表的な「宝」を紹介する。

1) 黒森神楽

関東人を中心とする我々が初めて知ったのが、神楽が日常の生活景の中にあることであった。娯楽が少ない沿岸域の人たちにとっては毎年同じ時期に集落にやってくる楽しみであり、心の支えであった。とくに国指定重要無形文化財でもある黒森神楽はファンが多い。神楽衆は、震災後は音を出す行為は控えなければならぬと考えていたが、「避難所で上演してほしい」という依頼が多数舞い込み、それを受けてお盆の頃から再開した。「神楽のおかげで生き延びた」と語る住民の声に神楽衆自身が驚いたという。

2) 防災知の継承と教育旅行プログラム

宮古には、防災の教訓を伝える知恵として「石碑」が多数残っていることが明らかとなった。明治33年、昭和8年と巨大地震津波を受けてきた宮古には、要所要所に戒めを伝える碑が立っていることが、東日本大震災後に見直されていた。よく読むと「揺れたら高い所へ逃げろ」「ここから下に家を建てるな」など大事なことが全部書いてあった。2012年には防災教育を兼ねたプログラムを実施する団体が生まれた。その後観光文化交流協会が引きつぎ、「学ぶ防災」というブランドとしてガイドツアーを提供し続けている。教育機関や企業などの研修に取り入れられている。

3) 海の幸・山の幸

宮古は紛れもなく「三陸」を代表する海の幸の産地であるが、沿岸域を除けば広大な山林が盛岡市まで続いている。これまでに合併してきた新里村、川井村、田老町などは山の幸の豊富さでも知られており、山菜、キノコ、木の実、農作物に名産が多い。寒冷地でもあるので保存食の文化も発達しており、伝統のお菓子なども数多い。幾度も津波で人口の大半を失ってきた沿岸域では、人口を維持するために山間部から移住して新たな住民となって生業を支えてきたが、食文化も海山ミックスのものが多い。

我々のツアーは、これらの資源調査をベースとして造成したものである。

黒森神楽(国指定重要無形文化財)



- 神楽の権現様を祀る神社と森は、山口集落の人々が維持管理
 - 集落の人々の誇り
- 黒森神楽は沿岸域の人々の心の支え
 - 「黒森神社のおかげで震災から生き残った」
 - 「避難所で上演してほしい」

「みやこ宝こよみ」(2012)

- ・宝の再認識・再発見・共有
- ・地域の人々が地産を知る手がかり
- ・観光客への地域プロモーションツール



ツアーの実際

ツアーの内容をご紹介します。朝 8 時半に神社参道入口近くにある山口公民館を出発し、大鳥居をくぐり、杉林を抜け、奉納された紫陽花が咲き乱れる参道を通って神社境内まで、ガイドの案内を受けながら、約 1 時間かけて登る。着いた頃に始まっている神事に参加し、奉納される黒森神楽を堪能する。終了後に境内の案内を神社総代会から受け、山腹にある樹齢 3000 年と伝えられる 2 本の杉を見たり、古い社殿跡を見たりして思い思いに過ごし、下山する。料金は 500 円で、お土産やパンフレット付である。



災害復興は学生・若手参画で！

年月とともに様々な人々と縁がつながり関わりは深くなっている。市役所、観光文化交流協会、黒森神社総代会、黒森神楽保存会、環境省など、それまで個別に動いていた機関・組織が、ツアーを核にして年に何度も顔を合わせ、対等に議論する関係となった。

研究者側では、座組をする時にプロジェクトに学生を参画させることを決めた。復興は長くかかることがわかっており、継続的に関わり続ける人材が次の担い手になることが望ましいこと、その過程に参画することは学生にとってまたとない学びの時間になると考えていたからである。現在も、文教大学国際学部私のゼミと立教大学観光学部の橋本研究室の学生が複数参画するプロジェクトチームを維持している。現地での活動の際は卒業生も参加するようになってきた。

ツアーへの参画は、2020 年初からのコロナ禍で 2 年続けて中止となった。2021 年には学生たちが主体となってオンラインツアーを 2 本実施した。それを機に、コアの活動（ツアー）は教員主導で企画を行うが、同時に学生が企画するプログラムを実施するようになった。長年の信頼感をベースに、学生たちが宮古で自由に動けるようになってきたのである。2022 年には「ミヤコノトリコ」というフリーペーパーを作り、2023 年には駅から 1 時間圏内のまち歩きマップを作成した。これは観光協会から頼まれたものである。店舗紹介と震災の記憶という 2 テーマで地図を編集し、観光客が歩きながら学べる地図である。

フェノロジーカレンダー（暦）の地域実装

ツアーと並行して我々が進めてきたもう一つのプロジェクトが、「フェノロジーカレンダー」の作成である。聞き慣れない言葉だと思うが、生物暦を指すフェノロジーと暦を組み合わせた造語である。一年間の自然・生物・人々の営み・暮らしなどが見える化したものである。震災当時、メディアはこぞって「失ったもの」に目を向け続けたが、そうではなく「ちゃんと残っている宝」を見ましよう、という密かな抵抗であった。2011 年の調査の柱は、実はこのフェノロジーカレンダーづくりであった。

語り始めると止まらないのが常で、どのインタビューも、「よそ者」の我々のいかなる素人質問にも情熱を傾けて丁寧に答えてくださった。宮古の方々同士も、ワークショップを行うと、知らなかった宮古の話や他の宮古人が語るのを楽しそうに聞いていた。生業が違えば日々のライフスタイルや知識は全く異なるのである。

出来上がった暦は今も地元のお寿司屋さんやビジターセンター、公民館等に貼ってある。しかしこの 15 年間で暦に載っている資源も様変わりした。無くなった祭りがあり、魚も獲れなくなった。来年度のプロジェクトテーマに、この暦の改訂を加えようと考えている。

フリーペーパー「ミヤコノトリコ」制作(2022)



ゲストハウスで 1 か月間自主的にインターンシップをした学生もいる。宮古で水揚げされる代表的な魚 2 種を使った料理を週に何度か提供し、注文が多かった方が勝ちという「宮古水中決戦」を企画して宮古の方々を楽しませていた。ちなみにサケとタラの勝負でタラが勝ちである。これを実践した学生は、その後、大船渡市の地域おこし協力隊となり、2025 年 4 月から三陸駅のカフェで働いている。

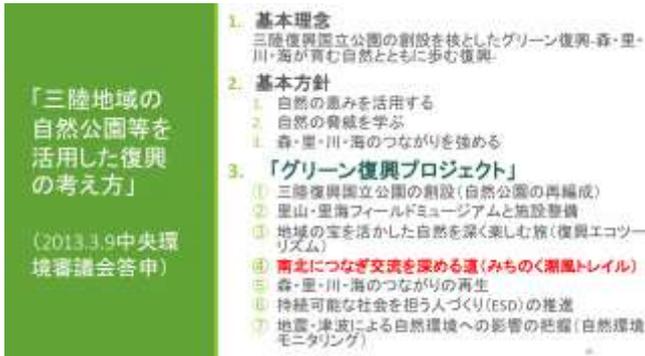
学生の自主活動(2024) 「3710で宮古二大魚水中決戦」



政策・制度との接続（環境省・公園・ジオパーク）

こうして私たちが、研究と実践と地域づくりのあわいで活動してきた過程で、宮古には、環境省のグリーン復興プロジェクトが立ち上がり、2013年に三陸復興国立公園ができた。2015年には三陸ジオパークが認定され、沿岸各市で活動が展開されている。「みちのく潮風トレイル」が2019年に全線開通した時には、宮古市は「トレイルタウン」を標榜し、ハイカーをもてなす町を目指すようになった。森・川・海を繋ごうという、宮古市の震災前からの観光と地域振興政策が沿岸域におけるこれらの活動と接続し、宮古市全体が動いているのが現状である。

三陸復興国立公園とトレイルについて言えば、環境省が動くときと地元の下の自治体も連動して動くので、そんな形でこの三陸沿岸域が束ねられる方向にある。



それから、森と川のつながりを再生するとか、色んなことを掲げて、進めようとしてきた。環境省が動くときと地元の下の自治体も連動して動くので、そんな形でこの三陸沿岸域が束ねられる方向にあると思う。

能登半島での暦づくりと観光提案

能登については、橋本先生が代表を務め、丸岡先生、清水先生、丸谷先生と私がメンバーとなって昨年度から活動を開始した日本観光研究学会能登半島沖地震特別プロジェクトを通じて活動している。今年（8月）初めには3日間、現地での活動を行った。さまざまなプログラムの中で、私が特に関わったのは2日目のパネルディスカッションでコーディネータを務め、輪島塗の塗師の方と能登島のガイドの方にお話を伺ったのと、3日目の学生ワークショップで一緒に能登半島全体のフェノロジーカレンダーを作ったことだった。

学生が27人ほど参加した大イベントであったが、最後には出来上がったフェノロジーカレンダーは模造紙を四枚繋げるとすごいものになった。カレンダーは、地元の方達が協議

会で進めたいとのことだったので、更に深掘りされると思う。本当は地域の方と一緒に進めないと意味がないが、今回は、勉強を兼ねて学生たちでの制作となった。



小括

宮古と能登で災害後の復興まちづくりに十数年関わってきた。災害復興研究は私の本職ではないが、経験値から言えることを小括してみる。

1) 復興と観光の関わりでは、観光が関わることで、地域が元あった状態よりもよくなることは可能である。

2) 観光は、発災から復興を経て次の災害に備える段階までの、すべてのステージで生まれうる。

3) 災害伝承は、時間が経つとその手法や姿を変える。今はまだ東北も能登も直接人や場所が伝えられるが、それも時と共に形が変わるであろう。東日本大震災で言えば、あの明治の頃のあの災害の伝承が石碑という形で残っていたりする。語り部も変わっていく。災害が近ければ、家族から伝えられることが多いが、やがてガイドや語り部や学校教材などの形で伝えるようになる。しかし、災害が一度あったところにはずっと残っていく。

4) 救災、復興復旧、復興まちづくりという一連の流れはシームレスに進む。早く進むところとなかなか進まないところがあり、場所によってそれぞれの段階となるが、同時並行的に起きることをとても強く感じた。

観光の再定義へ

2地域との関わりを通して、観光の再定義が必要だと思っている。観光の捉え方はいろいろあるが、特に災害との繋がりを考えると、関わり方の入り口としての意味は大きい。

我々の研究チームにも加わってくださっている復興科学研究者の室崎益輝先生はいつも、精神と教育と経済、これを支えるツールとして観光は非常に重要、とおっしゃっている。観光は、地域の build-back-better (想像的復興) を支える鍵になる。そして復旧は持久戦だ。宮古もまだ完全に復旧・復興したとは言い切れない。もっともどこがゴールなのかは誰にもわからないのだけれど、災害復興は新たなまちづくりである。持続的に関わる覚悟を持ち、できるだけ若い世代を巻き込んで進めていくことが重要である。

*9月14日仙台市での東北支部研究会講演の要約。